

環境問題の自己問題化に関する考察  
—プラネタリーヘルスの受容を見ずえて—

A Consideration on Self-Problematization of Environmental Problems:  
Toward Acceptance of Planetary Health

東方 沙由理\*

TOHO Sayuri

\*東京家政大学 家政学部 環境教育学科

〔要約〕地球規模での環境問題を解決していくには、その解決に向けて自ら行動を起こす力が必要だと考えられている。しかし広範囲で複雑で分野横断的な問題を自己問題化するのは大人でも難しい。そこでプラネタリーヘルス（人の健康と地球環境の健康との連続性）という概念を取り入れることで、地球環境を保持・保全する理由を好意的に受け入れることができるのではないかと考えた。

では日本で生活している人びとは、どれくらい自分と地球環境を連続したものとして認識しているだろうか。本研究では、プラネタリーヘルスを受け入れる土壌が日本にあるかどうかを確認するために、環境問題への関心と自分の生活との連続性の意識について調査した。その結果、環境問題への関心は自分の生活が環境に与える影響だけでなく、自分の置かれている社会的役割や何に責任を感じるかによって意識化されている可能性が示唆された。プラネタリーヘルスが生態学に根ざした概念だとすると、それが日本で受け入れられるためには身体的な直接行為にもとづく環境問題への関心が必要だと考えられる。

〔キーワード〕プラネタリーヘルス、連続性、意識、責任主体、直接行為

## 1. はじめに

プラネタリーヘルス（Planetary Health）という言葉がある。これは人の健康と地球環境の相互関係に注目し、健康、福祉、公平を実現しうる地球環境の形成について考えることを意図した概念である。2014年にランセット誌の主任編集者であるR. ホートンらによって提示された。2016年にはPlanetary Health Alliance（PHA）がロックフェラー財団の支援を受け発足し、プラネタリーヘルスの推進・研究・普及活動を行っており、日本では長崎大学がPHAに加盟（2020年）している。

ここでのキー概念は健康（Health）である。健康から地球環境をとらえることで、地球環境を保持・保全する理由を、安易に理解できるようになると期待される。その前提には、人の健康と地球環境の健康とは連続して

いるという生態学に根ざした考え方があ

る。では日本で生活している人びとは、どれくらい自分と地球環境を連続したものとして認識しているだろうか。もし連続性を認識せずそれぞれ独立したものとしてとらえているのであれば、プラネタリーヘルスが日本で普及する可能性は低いと予想される。

そこで本研究は、健康というキー概念は一旦保留にし、環境問題への関心と自分の生活との連続性の認識度をアンケートによって調査した。その際、質問内容に地域への愛着と守りたい自然・風景等の有無を加え、身近な環境についての意識について調べた。

調査内容に入る前に、日本での生活場所がどのようなものかを示しておく。

図1は国土交通省が調査・集計している国土の利用区分別面積の2020年のデータから作成したものである。この図から日本は森

林面積の割合が半数以上を占めるが、それは日本が山岳地帯であることと関係している。

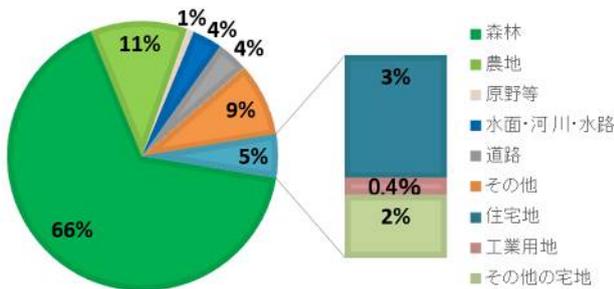


図1 国土の利用区別面積

国土交通省「土地利用現況把握調査」結果より作成

そこで次に標高と居住の関係を見たのが表1である。表1は社会実情データ図録に掲載されている「標高別の土地面積・居住人口(2000年)」を表化したものである。この表から標高150m未満の土地に92.2%の人が住んでいることがわかる。

表1 標高と居住の関係

	土地面積の割合		居住人口の割合	
	%	小計%	%	小計%
1000-	6.6	45.8	0.1	4.3
500-	20.9		1.8	
400-	8.5		0.8	
300-	9.8		1.6	
250-	5.8	12.5	1.3	3.3
200-	6.7		2	
150-	7.1	15.1	2.9	9.3
100-	8		6.4	
80-	3.8		4.5	
60-	3.9	26.6	6.3	82.9
50-	2.1		4.4	
40-	2.2		5.6	
30-	2.6		7.7	
20-	2.9		10.8	
10-	3.3		13.9	
5-	2.4		11.1	
3-	1.5		8.3	
1-	1.3		7.8	
<1	0.6		2.5	

また日本は大都市を中心に人口が集中しており(図2)、東京圏(埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県)、名古屋圏(岐阜県・愛知県・三重県)、大阪圏(京都府・大阪府・兵庫県・奈良県)の圏域に全人口の半数(約53%)が、北海道・宮城県・静岡県・広島県・福岡県を加えると全人口の3分の2(約68%)が居住している(総務省「令和2年度国勢調査」)。つまり日本の人びとの主な生活場所は太平洋ベルトの平地およびその周辺の

開発が進んだ土地といえる。このことから、地域への愛着と守りたい自然・風景等の有無は限定的ではないかと予想した。

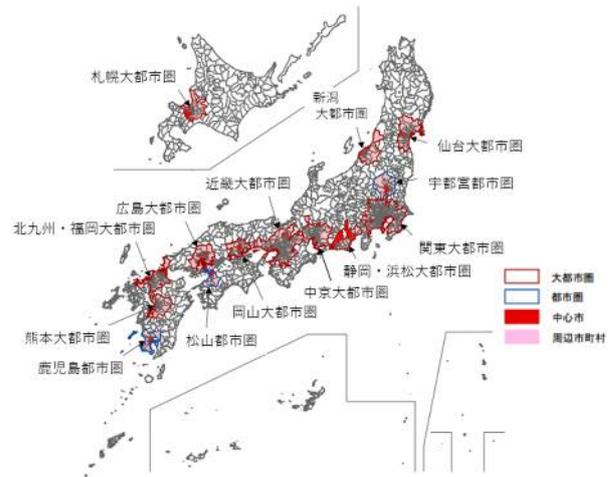


図2 大都市圏・都市圏 全国図

総務省統計局「令和2年 国勢調査」より抜粋

## 2. 方法

アンケート調査は株式会社クロス・マーケティングが提供している、セルフ型インターネット調査ツール(QiQUMO)を使用した。調査期間は2022年11月22日(火)~24日(木)の3日間、調査対象は男女ごとの5つの年代区分(20代・30代・40代・50代・60代)、各30回答(計300回答)を回収目標とした。その他の属性として居住地と職業の情報を得た。

質問項目・選択肢等を表2に示した。Q1は純粋想起にもとづく環境問題への関心の有無、Q2・3は自分の生活感覚と自己評価、Q4~Q7は環境負荷にたいする認識、Q8は生活の自己評価(再・選択)、Q9は社会課題との関係、Q10・11は未来に対する考え、Q12は地域への愛着の度合い、Q13守りたい自然・風景等の有無、Q14は行動に対する評価である。

表 2 質問項目と選択肢

質問番号	質問内容	回答種類	選択肢
Q1	あなたが関心のある環境問題を教えてください	自由記述	
Q2	あなたが日常生活の中で自分が自然環境を壊しているなど感じるときはありますか	単一選択	1.ある / 2.ない
Q3	Q2で「ある」と思った方はそれを感じる場面を、「ない」と思った方は壊しているという感覚がないのはなぜなのか、その理由を教えてください	自由記述	
Q4	下記のうち環境負荷が高いと感じるものの上から順に3つ選んでください (土地利用関係)	複数選択	1.耕作放棄地の増加 / 2.田畑の宅地化 / 3.工場・商業施設の建設 / 4.発電所の建設 / 5.海岸線の埋め立て / 6.都市部の再開発 / 7.地方の開発 / 8.新たな道路・線路等の建設 / 9.トンネルの建設 (海中倉) / 10.その他(具体的に記入してください)
Q5	下記のうち環境負荷が高いと感じるものの上から順に3つ選んでください (食品関係)	複数選択	1.規格外の生鮮野菜・果実の廃棄 / 2.食品ロス (食べられるのに廃棄される食品) / 3.消費期限・賞味期限 / 4.農薬の使用 / 5.ポストハーベスト (品質保持のための農薬) / 6.遺伝子組換え食品 / 7.化学調味料 / 8.個別包装 / 9.パッケージ / 10.その他(具体的に記入してください)
Q6	下記のうち環境負荷が高いと感じるものの上から順に3つ選んでください (廃水関係)	複数選択	1.食器用洗剤 / 2.食品用洗剤 / 3.台所用洗剤・漂白剤 / 4.メラミンスポンジ / 5.洗濯用洗剤 / 6.洗濯用漂白剤 / 7.柔軟剤 / 8.風呂用洗剤 / 9.風呂用固形剤 / 10.入浴剤 / 11.その他(具体的に記入してください)
Q7	下記のうち環境負荷が高いと感じるものの上から順に3つ選んでください (電気エネルギー関係)	複数選択	1.電気自動車 / 2.乗用車 / 3.運送・配送 / 4.24時間営業 (コンビニ・スーパー等) / 5.自動販売機 / 6.家電製品の多機能化 / 7.家電製品のモデルチェンジ / 8.薄型大型高画質テレビ / 9.オール電化 / 10.IoT化 (家電製品等のインターネット接続) / 11.その他(具体的に記入してください)
Q8	下記の①~⑩のうち自分の生活と関係が深いと思われるものを3つ選び、可能であればそれを選んだ理由を教えてください	自由記述	①原生林の減少 ②森林域の減少 ③耕作地の劣化 ④土壌汚染 ⑤河川・水質汚染 ⑥水源の枯渇 ⑦砂漠化 ⑧海洋酸性化 ⑨海洋プラスチック ⑩原油・天然ガス流出 ⑪野生動物の減少 ⑫生物多様性の喪失 ⑬大気汚染 ⑭酸性雨 ⑮オゾン層の破壊 ⑯PM2.5 ⑰温室効果ガス ⑱気候変動 ⑲水河・水床の融解 ⑳乱獲・乱伐 ㉑資源採掘 ㉒資源開発 ㉓紛争 ㉔貧困 ㉕南北問題 ㉖それ以外
Q9	SDGsのうち自分の生活と関係が深いと思われるゴールを3つ選び、可能であればそれを選んだ理由を教えてください	自由記述	1.貧困をなくそう / 2.飢餓をゼロに / 3.すべての人に健康と福祉を / 4.質の高い教育をみんなに / 5.ジェンダー平等を実現しよう / 6.安全な水とトイレを世界中に / 7.エネルギーをみんなにそしてクリーンに / 8.働きがいも経済成長も / 9.産業と技術革新の基盤をつくろう / 10.人や国の不平等をなくそう / 11.住み続けられるまちづくりを / 12.つくる責任 つかう責任 / 13.気候変動に具体的な対策を / 14.海の豊かさを守ろう / 15.陸の豊かさを守ろう / 16.平和と公正をすべての人に / 17.パートナーシップで目標を達成しよう / 0特になし、わからない
Q10	環境問題は解決できると思いますか	単一選択	1.思う / 2.どちらかといえば思う / 3.どちらかといえばそう思わない / 4.思わない / 5.その他(具体的に記入してください)
Q11	Q10のように考える理由を教えてください	自由記述	
Q12	あなたはあなたの住んでいる地域に愛着がありますか	単一選択	1.ある / 2.ややある / 3.ややない / 4.ない / 5.わからない
Q13	あなたの住んでいる地域には壊したくない・あってほしいと思える自然、風景、草木、花、生き物、野生動物等がありますか	単一選択	1.ある / 2.ややある / 3.ややない / 4.ない / 5.わからない
Q14	環境に配慮した行動の効果についてどのように考えていますか	単一選択	1.おおいに効果があると思う / 2.やや効果があると思う / 3.あまり効果はないと思う / 4.効果はないと思う / 5.効果はわからない / 6.効果よりもやることに意味があると思う / 7.その他(具体的に記入してください)

3. 結果と考察

回答回収数は合計 294, 女性 60代のみ回収数 24 で残りの性別・年代は回収目標を達成した。うち有効回答数は 274 (93%), 表 3 はその内訳である。

表 3 有効回答数

	回収数		年代別回収比率	
	男性	女性	男性	女性
20代	26	28	19%	20%
30代	27	28	20%	20%
40代	28	30	20%	22%
50代	26	27	19%	20%
60代	30	24	22%	18%
合計	137	137	100%	100%

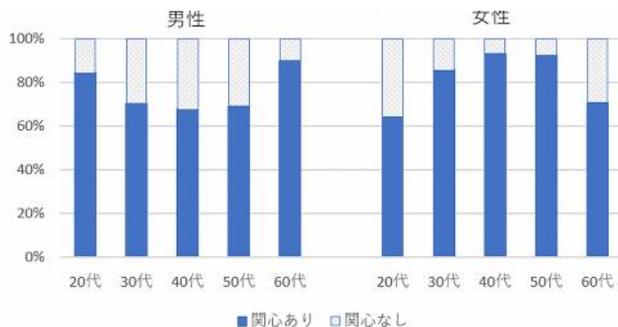


図 3 環境問題への関心の有無(年代別)

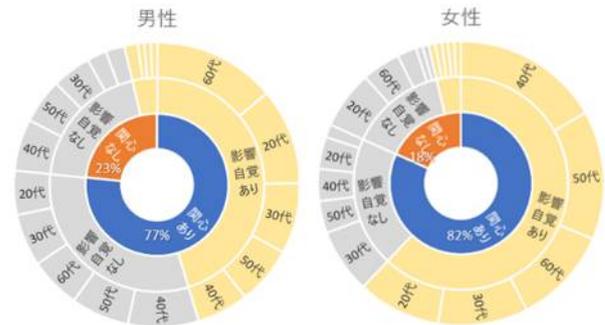


図 4 環境問題への関心と生活影響の自覚

関心の有無を年代別により比較すると 20代では男性の方が女性より高い結果が得られ (男性 85%, 女性 64%)。60代も同様の傾向であった (男性 90%, 女性 71%) (図 3)。図 4 は Q1 関心の有無と Q2 の自己評価 (生活影響の自覚の有無) の割合を性別・年代別で表した。Q1 の回答 (自由記述) のうち「ない・特になし」等と回答したものは関心なしとして計算した。全体として女性は男性よりも関心が高く、生活影響の自覚は女性 66%, 男性 49%と女性の方が多かった。なお生活影響の自覚を「ない」と回答した者のうち、「気をつけて生活している」「意識している」といった回答が男性 16%, 女性 13%みられた (全体換算 8%・4%)。

続いて Q12 の地域への愛着と Q13 の守りたい自然・風景等について、環境問題への関心の有無・性別・年代別に分けた表を作成した(表 4)。環境問題への関心なし(表 4-2)は回答数が少ないため参考とし、回答数が 2 以下は網掛けとした。回答の割合が 4 分の 3 (75%) 以上のセルに色をつけた。また肯定的回答(「ある・ややある」)より否定的回答(「ない・ややない」)の割合が高いものを赤色とした。

表 4-1 地域への愛着と守りたい自然等(年代別)

関心あり n=217

		Q12.あなたはあなたの住んでいる地域に愛着がありますか			Q13.あなたの住んでいる地域には懐かしくない・あってほしいと思える自然、風景、草木、花、生き物、野生動物等がありますか		
		ある	ない	わからない	ある	ない	わからない
		ややある	ややない		ややある	ややない	
男性	20代	73%	14%	14%	77%	9%	14%
	30代	74%	26%	0%	79%	16%	5%
	40代	58%	37%	5%	53%	37%	11%
	50代	78%	6%	17%	61%	28%	11%
	60代	81%	15%	4%	63%	26%	11%
女性	20代	39%	61%	0%	67%	28%	6%
	30代	75%	21%	4%	58%	25%	17%
	40代	68%	21%	11%	68%	21%	11%
	50代	88%	12%	0%	76%	16%	8%
	60代	76%	24%	0%	76%	24%	0%

表 4-2 地域への愛着と守りたい自然等(年代別)

関心なし n=57

		Q12.あなたはあなたの住んでいる地域に愛着がありますか			Q13.あなたの住んでいる地域には懐かしくない・あってほしいと思える自然、風景、草木、花、生き物、野生動物等がありますか		
		ある	ない	わからない	ある	ない	わからない
		ややある	ややない		ややある	ややない	
男性	20代	50%	25%	25%	50%	25%	25%
	30代	25%	63%	13%	38%	25%	38%
	40代	33%	56%	11%	22%	56%	22%
	50代	63%	13%	25%	75%	0%	25%
	60代	33%	67%	0%	33%	67%	0%
女性	20代	30%	20%	50%	30%	40%	30%
	30代	25%	50%	25%	0%	75%	25%
	40代	50%	50%	0%	50%	50%	0%
	50代	0%	100%	0%	0%	100%	0%
	60代	86%	0%	14%	71%	0%	29%

環境問題に関心ありの区分では、地域への愛着と守りたい自然・風景等の問いに対し、1 区分(Q12・女性・20代)を除いたすべてで肯定的回答が半数(50%)をこえた。一方環境問題に関心なしの区分では、否定的回答が肯定的回答を上回る項目が増加し

(Q12・10区分中5区分、Q13・10区分中4区分)、「わからない」と回答した割合が増加した。これらの結果から、環境問題に関心がないことと地域への愛着や守りたい自然・風景等がないことは影響があるようにみえる。しかし、60代の女性に注目してみると

(図 3・表 4-2)、環境問題の関心の割合は低下するが地域への愛着や守りたい自然・風景等に対して肯定的回答が高いという結果となっている。そのため、環境問題の関心と地域への愛着や守りたい自然・風景等との間には別の要因が存在あると考えられる。

そこで次に職業区分によって表を作成した(表 5)。職業区分は表に記載されている 11 職種に加え、会社経営(経営者・役員)・農林漁業・専門職(弁護士・税理士等の法務経営の専門職)の 3 職種(計 14 職種)があったが、回答数がそれぞれ 7・0・3 と 10 以下だったため、表 5 には掲載しなかった。また環境問題への関心なし(表 5-2)は回答数が少ないため参考とし、回答数が 2 以下は網掛けとした。先と同様、回答の割合が 4 分の 3 (75%) 以上のセルに色を、肯定的回答より否定的回答の割合が高いものを赤色とした。表 5-1 では職種によって肯定的回答と否定的回答の割合の差が小さいもの生じたため、その差が 10%台に収まるものを枠で囲んで表示した。また地域への愛着に対し守りたい自然・風景等の肯定的回答が 10%以上上昇したものを太字にした。

表 5-1 地域への愛着と守りたい自然等(職業別)

関心あり n=210

	Q12.愛着			Q13.自然・風景		
	ある	ない	わからない	ある	ない	わからない
会社勤務(一般社員)	81%	14%	5%	64%	29%	7%
会社勤務(管理職)	78%	22%	0%	56%	44%	0%
公務員・教職員・非営利団体の職員	71%	14%	14%	79%	21%	0%
派遣社員・契約社員	86%	14%	0%	79%	7%	14%
自営業(商工サービス)	92%	8%	0%	92%	8%	0%
専門職(医師等の医療関連の専門職)	71%	29%	0%	57%	43%	0%
パート・アルバイト	50%	42%	8%	65%	19%	15%
その他の職業	44%	33%	22%	67%	11%	22%
専業主婦・主夫	70%	24%	6%	64%	24%	12%
学生	43%	57%	0%	71%	29%	0%
無職	70%	25%	5%	65%	10%	25%

表 5-2 地域への愛着と守りたい自然等(職業別)

関心なし n=56

	Q12.愛着			Q13.自然・風景		
	ある	ない	わからない	ある	ない	わからない
会社勤務(一般社員)	43%	26%	30%	43%	22%	35%
会社勤務(管理職)	50%	50%	0%	50%	50%	0%
公務員・教職員・非営利団体の職員	100%	0%	0%	100%	0%	0%
派遣社員・契約社員	25%	75%	0%	25%	50%	25%
自営業(商工サービス)	0%	33%	67%	0%	33%	67%
専門職(医師等の医療関連の専門職)	50%	50%	0%	50%	50%	0%
パート・アルバイト	50%	33%	17%	50%	33%	17%
その他の職業	0%	100%	0%	0%	100%	0%
専業主婦・主夫	33%	50%	17%	17%	50%	33%
学生	100%	0%	0%	100%	0%	0%
無職	57%	29%	14%	57%	43%	0%

この結果から、環境問題への関心ありの区分では、自営業（商工サービス）の地域への愛着と守りたい自然・風景等の肯定的回答が両方とも非常に高いことがわかった。一方、パート・アルバイト、その他の職業、学生では地域への愛着が他の職種に比べて低く、肯定的回答と否定的回答の割合が近くなった。またこの3職種は、地域への愛着の肯定的回答が50%前後なのに対し、守りたい自然・風景等の肯定的回答は65%以上を示すという特徴がみられた。他方、会社勤務（一般社員）・会社勤務（管理職）・専門職（医師等の医療関連の専門職：以下（医療関係））は地域への愛着の肯定的回答に比べ、守りたい自然・風景等の肯定的回答割合が低くなるという結果を示した。この違いは地域への定着度（あるいは定着動機・定着年数）が異なっていることから生じていると考えられる。

これらの傾向を図示したものが図5である。図5の傾向から、これらを3つのグループ——〈横ばいグループ〉〈右上がりグループ〉〈右下がりグループ〉——に分けた。

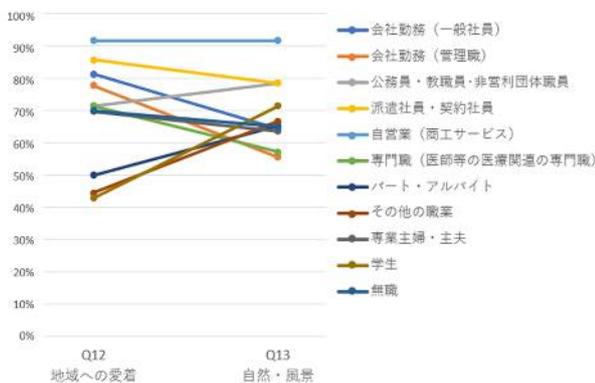


図5 肯定的回答における関係(職業別)

続いてこの3つのグループが具体的な問題関心とどのように関係しているのか検討した。図6はQ1で関心のある環境問題で得た自由記述の回答を分類し、グループ順に分けたものである。その結果、問題関心の内容によってさらに特徴づけをすることができた。

右下がりのグループは、CO<sub>2</sub>という回答が入っているかどうかで特徴づけられ、会社

勤務（一般社員）・派遣社員・契約社員と会社勤務（管理職）・専門職（医療関係）に分けられる。後者は会社の経営や仕事の決定に関与できる職種とできない職種とみることができる。

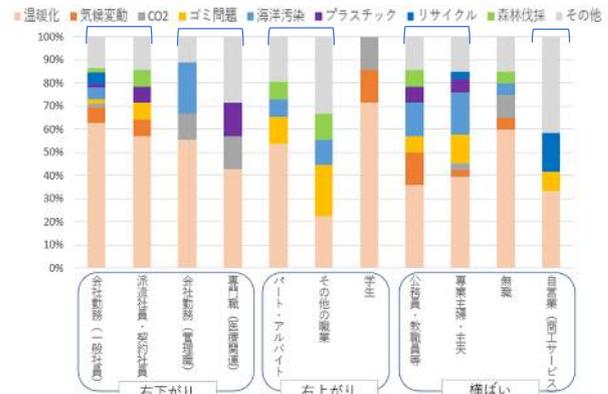


図6 関心のある環境問題(職業別)

右上がりのグループは、海洋汚染と森林伐採という回答が入っているかどうかで特徴づけられ、パート・アルバイト・その他の職業と学生に分けられる。このグループは短時間労働が主の職種と考えられ、その中でも学生は勉学中心という点に違いがある。また学生は回答が温暖化と気候変動に集中していることから、知識的関心度が高いと考えられる。

横ばいのグループは、プラスチックという回答、あるいはリサイクルという回答が入っているかどうかで特徴づけられ、公務員・教員・非営利団体職員（以下、公務員・教員等）・専業主婦・主夫、無職、自営業（商工サービス）の3つに分けられる。公務員・教員等・専業主婦・主夫は職種に関する共通性があるわけではないが、時事問題や社会問題といったニュースに関心のある層だと思われる。なぜなら、この2つの職種はプラスチックだけでなく海洋汚染への関心も一定数存在しており、海洋汚染と分類した回答の中には海ゴミ問題やマイクロプラスチックという記述があったためである。つまり、新聞やニュース等から得た情報からプラスチックと海洋汚染が結びついて認識している可能性がある。自営業（商工サービス）はリサイクル

と答えた点が特徴だが、自営であるため経営や仕事の割り振り等の決定権があること、あるいは自分自身が地域での回収主体として関わっていることが予想される。

以上より、地域への愛着と守りたい自然・風景等に関する意識は職種によって違いが存在し、この違いは地域への定着度に関係すること、さらに職種によって環境問題の関心の内容に特徴がみられることがわかった。これらのことから環境問題への関心は、自分の置かれている社会的役割やどういった点に責任を感じるかによって意識化される可能性が示唆される。

その上で職種ごとに Q3 自分の生活影響の自覚とそれを自覚する場面をみた (図 7, 全体比較)。図 7 から影響を自覚している割合は、専業主婦・主夫が高く無職で低いこと、自覚する場面は使う・捨てる・排出するという直接消費行為に由来することがわかった。これらは都市型生活の特徴といえる。また消費と廃棄による環境問題への認識は、内から外への関係としてとらえられる。プラネタリーヘルスの観点からいえば内から外への影響以上に外から内への影響——健康の観点からいえば身体への影響——が重視される。そのため、社会的役割や消費行為に起因する環境問題への関心の持ち方はプラネタリーヘルスを受け入れる土壌とはならないと考えられる。プラネタリーヘルスを受け入れるには外から内への影響に、特に自然環境との生態学

的關係に目を向けることが必要である。自分の直接行為が環境問題への自覚をうながすのであれば、自然環境との身体的接触という直接行為にもとづいた生態学的理解が、プラネタリーヘルスを受け入れる土壌となるのではないだろうか。

#### 4. 結論

本研究では、プラネタリーヘルスを受け入れる土壌が日本にあるかどうかを確認するために、自分の生活と環境問題の連続性の認識について調査・検討した。その結果、環境問題への関心は自分の生活が環境に与える影響からだけでなく、自分の置かれている社会的役割や責任主体から意識化されている可能性をみた。これは仮説の段階であり、今後検証が必要である。

今回職種として農林漁業のデータを得ることができなかった。自然環境との身体的接触と直接行為にもとづく生態学的理解をプラネタリーヘルス受容の軸とするならば、農林漁業に従事している人びとが環境問題をどのようにとらえているかを明らかにすることが重要である。これは今後の課題としたい。

またはじめににおいて、日本の生活場所の特徴から地域への愛着と守りたい自然・風景等の有無は限定的ではないかと予想したが、その予想とは裏腹に肯定的回答が多くあった。その理由や愛着の種類、対象となる自然・風景等についても今後深めていきたい。

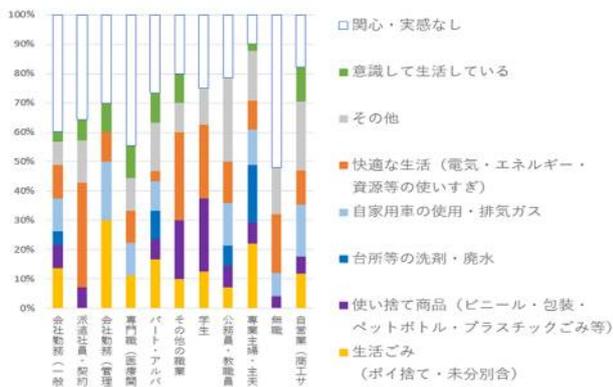


図 7 環境問題への関心の有無(職業別)

#### 参考文献

Horton, R., Beaglehole, R., Bonita, R., Raeburn, J., McKee, M. & Wall, S. (2014) From public to planetary health: a manifesto. *The Lancet*, Volume 383, Issue 9920, 8–14  
 長崎大学監訳, 河野茂総監修(2022)『プラネタリーヘルス——私たちと地球の未来のために』丸善出版株式会社